

新会長あいさつ

会長就任にあたって



東京理科大学 教授
狩野 紀昭

21世紀の最初の年に会長に就任することは、大変光栄なことであり、これまで35年余り品質管理界に身をおいてきた者として全力を尽くしてその任にあたる覚悟です。特に、今期から学界出身の会長の任期は2年になり、より一層その責任の重大さを感じています。

「New York Times」(2000/9/9) をして

「日本は、品質管理危機 (quality control crisis) に直面している。かつて、完璧な品質管理を実施する国として名声を博した国であるが、…」と報道せしめるような事件の発生により、盤石のように考えられてきた日本製品の品質に対して信頼感が揺らぎ始めたかのような印象を与えています。もちろん、多くの日本製品は、たとえば米国市場での自動車の品質指標として知られている JD Power 社 IQS (initial quality study) が示すように、それなりのレベルにあり、決して自信を喪失する必要はありませんが、今回の品質危機を真剣に受け止めなければなりません。

本学会は、このような時期に創設30周年を迎えます。新しい世紀はグローバル化がますます進展し、ITの発展・普及が急速に進むことで始まります。本学会の運営においても、この流れに沿った活動が今まで以上に求められてくるでしょう。そこで、次の事項を積極的に取り組んでいきたいと考えています。

(1) 新しい時代の流れに則した学会運営を図ることをねらいとして、30周年記念事業を行います。総会で創設が承認された品質管理推進功労賞の表彰に加えて記念式典の挙行、学会 web の充実強化、

記念誌の刊行、無料相談室の開設などが準備を進めている事業内容です。必要となる費用は積立金に加えて産業界、会員、賛助会社に寄付をお願いして賄います。

(2) 本学会が発展していくためには、会員の研究、業務にとってなくてはならない存在となる必要があります。このねらいを実現していくために、ITの積極的活用による web 上での会員相互の交流を含む会員サービス強化の基盤整備に務めます。この結果として会員数の3,000人への回復を図りたいと考えています。

(3) グローバル化の中で海外との連携を強化することは避けて通れない課題です。長期的視点から海外との関係について基本方針を確立したいと考えています。

(4) 品質危機克服に向けた活動を展開するとともに、社会に向けた情報発信を行う体制づくりを図ります。

(5) 新しい世紀における品質あるいは質を発展させていくためには工学的側面に加えて社会科学・人間科学・医学などを含めた学際的立場からの取り組みが重要になってきます。そのために本学会の会員層を工学以外の分野にも広げていく活動を展開します。本学会の名称についても改めて検討してみたいと考えています。また、女性の参画も広く求めていきます。

いずれにしても上述の活動を展開していくためには、会員の皆様のご協力・ご支援がこれまで以上に必要となります。よろしく申し上げます。

第 29 年度会長の退任にあたって



前田建設工業(株)
代表取締役会長 前田又兵衛

平成 12 年 10 月 28 日、明治大学創立 120 周年記念館で開催されました第 30 回通常総会において、会長の任期が終了いたしました。会員の皆様方の学会活動へのご支援とともに、副会長をはじめ各役員、各支部役員並びに事務局の方々の言葉では言い表し得ないご尽力により任期を全うすることができました。心から御礼を申し上げます。

さて、21 世紀を目前にした日本は、品質に関する思いもかけない出来事が発生し、高品質であった日本の基盤に緩みをきたしている現状であり、凋落傾向といわれている日本の競争力を復活させるには、政産官学が一体となり、取り組まねばならぬとの認識のもとで本学会における諸活動を進めてまいりました。

本学会が目的とする、「品質管理に関する学理および技術の進歩発達を図り、もって学術、産業の発展に寄与する」ことの遂行、「21 世紀への提言」に基づく活動の開始、学会創設 30 周年へ向けての準備等々に対し、学会を構成するすべての組織が総力をあげ、学会の活性化と基盤整備に努め、日本の産業競争力強化への努力をしてまいりました。

その主要事項を 4 点ご報告いたします。

第一は、国内外で進展がめざましく、話題性のあるテーマへの取り組みを活性化するために、「複合技術領域における人間行動研究会」「医療経営の総合的質研究会」「ナレッジ・マネジメントと QFD 研究会」を発足するとともに、品質にかかわる重要テーマとして「重大な品質問題」「ISO 9000 s への対応」「医療の質改善」をテーマにシンポジウムを開催し、会員に役立つ、最新かつ最先端の情報を提供してまいりました。

第二は、前年度（第 28 年度）に纏められた「21 世紀への提言」を各委員活動の一環として推進いたしました。また、小淵前首相が主催した「ものづくり懇談会」において、学会として積極的な提言を行いました。

第三は、多様な変化を遂げつつある国際化の中で、日本の品質管理の道筋を見いだすために、米国品質協会および中国質量管理協会の各々のトップとの意見交換などを通じた国際的な視点に立ち、国内外の品質管理関係諸団体との連携を深化してまいりました。

第四は、学会創設 30 周年を迎えるに当たり実行委員会を結成し、21 世紀の学会活動の節目として起点になる記念事業の枠組みを決め、準備に着手しました。

これらに加え学会活動を長期的視点から問い直し、今後の発展への橋渡しとしての足掛かりとなるような様々な新しい潮流が、幾多のディスカッションを経て結実してきたことが最大の成果ではないかと考えております。

これら諸活動の成果は、一朝一夕で成し遂げられるものではなく、過去長きに亘る学会活動の成果を礎とした継続的な目標であり、21 世紀の学会活動に引き継いでいくべき事柄と考えております。

第 30 年度は狩野紀昭会長、山岡建夫副会長、圓川隆夫副会長を中心に強力な布陣が敷かれました。

狩野会長のもとで、21 世紀の初年度に創設 30 周年を迎える本学会が一層の発展を遂げることを祈念しまして会長退任のご挨拶といたします。